

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 田場 あゆみ

論 文 題 目

日本のバイエスニック中学生における  
民族的アイデンティティ形成に関する研究

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井 次郎  
名古屋大学大学心の発達支援研究実践センター教授 松本真理子  
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 平石 賢二

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、民族的アイデンティティ形成過程が活性化する青年期前期において、沖縄県在住のバイエスニック児童（いわゆるハーフ）に焦点をあてている。こうしたバイエスニックの中学生が、民族性に関してどのような内的・外的経験をしているのかを、日本人中学生との比較や心理面接の事例を提示して質的・量的に検討することを通して明らかにし、それが彼らの民族的アイデンティティ形成過程と心理的健康にどのような影響を及ぼすのかについて検討することを目的としている。

第1章では、アイデンティティ概念の説明を行い、バイエスニックの民族的アイデンティティの構成概念と発達モデル、そして民族的アイデンティティ形成過程でバイエスニックが行うとされるコミュニケーション方略（アイデンティティ交渉）について先行研究を概観し、本論の特色の一つでもある沖縄人アイデンティティについて説明している。

第1章では、アイデンティティ概念の説明を行い、バイエスニックの民族的アイデンティティの構成概念と発達モデル、そして民族的アイデンティティ形成過程でバイエスニックが行うとされるコミュニケーション方略（アイデンティティ交渉）について先行研究を概観し、本論の特色の一つでもある沖縄人アイデンティティについて説明している。

第2章では、沖縄県在住のバイエスニック中学生 12 名を対象に、単一の民族的アイデンティティ（日本人・外国人・沖縄人）と二文化アイデンティティ（日本・外国と沖縄・外国）が、自我アイデンティティ、心理的健康との間にどのような関連があるのかを純日本人中学生とどのような差異があるのかについて量的検討を行っている。その結果、日本人は日本人アイデンティティと沖縄人アイデンティティの両方が民族的アイデンティティとして位置づけられている一方で、バイエスニックは、沖縄人アイデンティティが主たる民族的アイデンティティとしているものの、日本と外国は沖縄と異なる国・文化と認識していた。このことから、バイエスニックにとって沖縄人アイデンティティは日本人アイデンティティまたは外国人アイデンティティ同一化の葛藤や混乱を和らげるクッション的役割を果たしていることが示唆された。

第3章では、民族的アイデンティティに関する半構造化面接の回答をバイエスニック児童を対象に行い、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）で整理・分析である。その結果、彼らは学校で民族性に関して褒められる、逆に差別されるなどのポジティブ・ネガティブ両方の経験をし、差別の加害者・支援者ともに同級生が多く、中には教師も加害者になっているケースがあったことがわかつ

## 論文審査の結果の要旨

た。学校での民族性に関する経験は民族的アイデンティティの形成・発達に大きな影響を及ぼすことを論じている。

第4章では、民族的アイデンティティの情緒的側面などが投影されると仮定した投影法の一つである風景構成法を用いて、民族的アイデンティティと風景構成法の関連について検討を行っている。その結果、日本人とバイエスニックにおいて自己規定した民族的アイデンティティへの同一化が強い群（日本人は全員）は田を具体的に描写できたのに対し、同一化が弱いバイエスニックの群は、具体的に描写できていなかったことが明らかにされた。

第5章では、バイエスニック児童を対象とした心理面接事例を取り上げている。「私がハーフだから皆が文句を言ってくる」と訴えたバイエスニックの女子中学生のスクールカウンセリングでの心理面接事例を考察し、面接では風景構成法を導入し、クライアントは全18回の面接の中で風景構成法を3回描いた。クライアントの対人関係トラブルの背後にあった民族的アイデンティティ形成の問題について風景構成法を導入することでより理解を深め、心理支援に活かすことができた。

第6章は、総合考察で全体の結果をまとめ、その。本論文が青年期前期のバイエスニックの民族的アイデンティティ形成過程の理解に果たす意義として、①日本人とバイエスニックの民族的アイデンティティ形成の違い、②他者との関係性が民族的アイデンティティ形成に大きく影響する、③民族的アイデンティティと自我アイデンティティの発達は独立している、④民族的アイデンティティ保持の程度は心理的健康に影響を与える、⑤風景構成法は民族的アイデンティティ保持や形成困難の状態を把握することが可能で心理支援の補助になる、の5つに整理している。本論文の限界について言及し、日本のバイエスニックの民族的アイデンティティ形成の理解と支援の在り方について展望した。

本論文の学術的意義および貢献は次の点にある。

- 1) 既存の研究は帰国子女や外国人児童に焦点をあてているものが多く、所謂ハーフの子どもに関する研究はまだ少なく、その点意義がある
- 2) 沖縄の特殊な社会文化的事情を反映する、バイエスニック児童の発達の課題を取り上げていることが独創的
- 3) 多種多様な計量的および質的研究方法を用い、マルチメソッドでバイエスニック児童のアイデンティティ発達課題を多角的にアプローチしている
- 4) 二文化併用者のアイデンティティ問題に風景構成法を用いて、文化ごとの違いを明らかにしようとしていることは極めて独創的で興味深い

## 論文審査の結果の要旨

一方、本論文に対して審査委員からは主に以下の疑問が呈された。

- 1) 論文のタイトルは「日本のバイエスニック児童」となっているが、正確には「沖縄のバイエスニック児童」ではないか
- 2) 風景構成法は育った環境が原風景となり描かれる可能性があり、バイエスニックとは無関係の要因の影響を受けるのではないか
- 3) アイデンティティの探求とコミットメントに関しては、中学生よりも高校生以上において経験されやすいのではないか
- 4) 使用した自我アイデンティティ尺度項目の内容的妥当性が疑わしい
- 5) 風景構成法の一アイテムである田んぼを取り上げて考察しているが、沖縄には田んぼがないため、的確に表現できるのか、またそれに関する「田ショック」という概念が沖縄人に適用できるのか

これらの指摘に対して、博士学位請求者は問題点をよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。